

## ジョージア (グルジア) 便り その38

## 『新国立劇場での長いソロ』

文 高野陽年 text by Yonen Takano



筆者は7月22日に新国立劇場において開催された「バレエ・アステラス 2017」に出演した。

黒い八分丈のスパッツにベージュのシューズ、上半身は裸。簡単な衣装だが鏡の前で幾度となく体のラインをチェックし、スパッツのダブリを直した。トイレに行く回数も多かった。いつになく僕は自分の出番まで緊張していたのだ。それは日本の新国立劇場のガラコンサート舞台だからというものもある。だがそれ以上に僕が一人で8分強を踊ることへのプレッシャーからなのだ。

通常ガラコンサートなどではデュエットでの出演が多く、特に日本では古典のバレエから抜粋されるペアの踊りが好んで踊られる。昔から繰り返し踊られてきたコンサート定番である。古典のデュエットはおおよそ10分弱、もちろん途中、個人で踊るパートもあるが、それらは長くて2分弱である。

つまらないものを見たときの8分間は退屈で苦しいほどの長さを感じるだろう。けれども僕に今回作品を提供してくれたヨルマ・エロは世界中で評価を受けている振付家だ。この作品を初演し、伝授してくれたマルセロ・ゴメスはニューヨークでもモスクワでもこのソロで喝采を受けている。ようすに今回は作品のせいにもパートナーのせいにもできない、ただ純粹に高野陽年というダンサーの資質が図られる舞台であったのだ。

三千の瞳が応でも僕に集中する。彼らの眼差しに失望の色を与えてしまふのではないかとこの恐怖心があった。しかも僕の周りは古典を踊らせたらピカイチのダンサーたちばかり。大技でどんだん会場を沸かせる中、僕の踊る一見難解な現代作品で面白いと思ってくれるのか。リハーサルときに仲間から高評価を受けていても本当に心から思っているのかと猜疑心が拭えなかった。主催者は何も僕に意地悪をしてソロを踊らせようとしたわけではない。僕は自分から無謀にも8分間舞台上で一人であることを選んだのだ。

て難しいチャレンジをしたのだ。だが今までのダンサー「高野陽年」ではこの困難に立ち向かえるか不安であった。出番を待つ僕は、照明が落ちた暗い袖幕の鏡の前で姿見をし、世界的スター、マルセロ・ゴメスになったつもりで踊ることにした。もちろん違うタイプのダンサーであるし、ただ彼の真似をしても、偉大なスターである彼の足元にも及ばない。彼ならどう舞台に取り組むか、どういう点をこだわるか、短期間に吸収したトップダンサーのエッセンスをいかに落としこむか。

不思議とスポットライトへ向かう僕の背中が大きくなった気がした。

自信を持ってさあ踊ろう！世界に飛び出そう！

## Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

